

## 膜性腎症と過ヨウ素酸メセナミン銀染色についての検討

◎藤田 裕太<sup>1)</sup>、片山 ひかり<sup>1)</sup>、中村 博<sup>1)</sup>  
順天堂大学医学部附属 浦安病院<sup>1)</sup>

## [はじめに]

過ヨウ素酸メセナミン銀染色は糸球体病変を確認する上で重要な染色の一つである。メセナミン銀反応中において尿細管の刷子縁が茶褐色に呈色してもその後の僅かな反応では糸球体基底膜(以下 GBM)が黒色化しないことがある。今回我々は本染色が最も際立つ膜性腎症に焦点をおき、GBM の黒色化までの最適な反応終点を見出すことを目的とした。

## [対象と方法]

当院にて膜性腎症と診断された腎生検材料および対照として腎癌患者の正常腎からの作製材料を用いた。銀液の加温には当院で使用しているマイクロウェーブおよびパラフィン溶融機を用いた。検討方法①GBM 褐色から黒色化までの反応時間と切片厚の関連性検証 膜性腎症及び正常腎について 1,2,3 $\mu$ m の切片を作製、銀反応を行い GBM が褐色を示してから黒色化するまでの反応時間について検討を行った。

②反応終点の見極め 膜性腎症及び正常腎について

1 $\mu$ m の切片を作製、銀反応を行い GBM の黒色程度を段階的に分け、膜性腎症の所見が得られる反応終点および、正常腎の GBM が全周性に黒色を示す反応終点について検討した。

## [結果]

- ① 切片厚が薄くなるに従い、GBM が褐色を示してから黒色化するまでの反応時間が延長した。
- ② 本来の GBM 厚より、厚みが増した黒色変化を示した反応点では後処理後 GBM が弱拡大で黒色を確認でき、明瞭に観察できる最適な反応点であった。

## [考察]

- ① 切片厚が薄い場合には切片中の銀が結合する部位が減少するため、GBM の黒色化までの反応時間が延長すると考えられ、反応に時間を要することで GBM は黒色化すると考えられる。
- ② 銀反応後の置換、定着処理により黒色の色調が薄くなるため GBM 本来の厚みよりも厚みが増すまで銀反応を行うことが重要だと考えられる。